

テーマ9. 身長が低いことに悩んだら、、、

低身長

当院では低身長に対する治療を積極的に行っています。背が伸びるためには成長ホルモンが大きく関わるため、分泌能（自分で成長ホルモンを出す能力）を調べる必要があります。低身長が気になったり、保育園、幼稚園、学校、健康診断で低身長を指摘された場合は、成長の記録を持って午前中の小児科外来を受診してください。

●診断方法、検査方法は？

診察、血液検査、レントゲン検査を行った後、成長ホルモン分泌刺激試験のために2泊3日の検査入院が必要です（水曜午後入院、金曜午後退院）。脳内の下垂体が成長ホルモンを分泌するので、脳の精密検査（MRI）を一緒に行います。入院して検査するのは大変ですが、午前中、空腹時に検査することが決まりなので、一緒に頑張りましょう。苦痛を伴うような検査ではありません。

●診断、治療は？

検査の結果から、多い病気として、成長ホルモン分泌不全性低身長、未熟児で生まれた場合はSGA性低身長があります。その他にも、生まれつき骨の成長障害を来す軟骨異栄養症やターナー症候群、プラダー・ウィリー症候群、ヌーナン症候群、慢性腎不全という低身長を来す病気がわかることがあります。これらは、成長ホルモン補充療法の適応です。自己注射を毎日行っていくことになります。はじめは自己注射を嫌がる子どもたちもいますが、最後には身長が伸び、みんな満足してくれます。毎年成長ホルモンキャンプという、病気への理解や治療のやる気の向上、同じ治療を行っているお子さんたちとの悩みの共有などを行っています。

低身長の多く、当院で成長ホルモン分泌刺激試験を受けていただいた方の70％は体質性低身長と判断され、病気ではないので成長を見守ることになります。一方で、成長ホルモン補充療法が必要とされる場合は、早く始めるほど最終身長が大きくなります。思春期になってから治療を始めても、十分な成長は期待できません。

低身長の中に、治療が必要な子どもたちがいます。是非積極的に小児科外来を受診して下さい。現在約50名の子どもたちが当院で治療を受けています。大きくなりたいという子どもたちの希望と一緒に叶えてあげましょう。